

〈共同研究〉

「「トライバリズム」概念による現代ヨーロッパ政治の検討」

クルト・ドゥブーフ
「トライバル化がなぜ戦争へとつながるのか」

解説：松 尾 秀 哉*

訳：小 松 崎 利 明†

解説

本稿は、2023年10月20日に龍谷大学（深草）21号館203教室で、13：30-14：30（および質疑30分）に行われたクルト・ドゥブーフ氏の講演の翻訳である。ドゥブーフ氏はベルギーのブルージュ出身で、ルーヴェン大学を卒業した。その後、イギリスのオックスフォード大学の客員研究員を経て、ベルギーの首相であるヒー・ヴェルホフスタットのスピーチライターとして知られるようになった。その後欧州議会の派遣研究員としてカイロに駐在し、米タハリール中東研究所ブリュッセル支部のディレクター、ニュースサイトであるEUobserverの編集長として長く務めた。現在は、ベルギーにあるブリュッセル自由大学のガバナンススクール上級研究員である。

ドゥブーフ氏は、当初、エジプト在住の経験から中東の国際政治研究を進め成果を刊行していた。ことにハマスとイスラエルの紛争以降、国内外のメディアに露出しており、中東政治研究者として知られる（日本でも2023年11月7日の読売新聞にインタビューが掲載されている）。ただし博士号はブリュッセル自由大学で、論文 *Why has Latin Averroism largely disappeared from the 20th century written histories of philosophy?* によりブ

リュッセル自由大学で2021年に取得しており、その点での専門はアジア（中東）とヨーロッパの思想史研究である。

他方でドゥブーフ氏の研究は、若いころから幅広く現実の政治の世界と接してきたことによって得た洞察力、現実の切り取り方にも面白さがあり、その代表作がDebeuf, Koert (2018) *Tribalization. Why war is coming*. (Brussels: Academic and Scientific Publishers)であろう（クルト・ドゥブーフ著、臼井陽一郎監訳（2020）『トライバル化する世界——集合的トラウマがもたらす戦争の危機』、明石書店）。

「トライバリズム (tribalism)」とは、とみに9・11同時多発テロ以降頻発する国際的な過激派グループによるテロや、2015-6年に欧米を席卷し、今再び注目されている「トランプ現象」に代表される、排外的でときに過激な「自国中心主義」を指す。その台頭のプロセスを「トライバル化 (tribalization)」と言う。

一般的にこうした現象を、私たちは「ポピュリスト」「ポピュリズム」という言葉で形容することが多い。しかし「ポピュリズム」は「人民主義」とも訳され、しばしば腐敗したエリートやそれを支える制度を批判する、「デモクラシー」に相通じるものという解釈もされ、論者により「デモクラシーの敵か味方か」が一定せず、常に論争的になる。その点では「トライバル化」（現在英語圏で出版されている本ではtribalismとしてその内容を論じようとするものが圧倒的に多い）

* 龍谷大学法学部 教授

† 天理大学国際学部 准教授

龍谷大学社会科学研究所客員研究員

は、先の——非デモクラティックな——自国中心主義に当てられる点で、使い方は単純である。この点に限定的に「トライバル化」ないし「トライバリズム」の意義を見いだすことができる。

ただし、英語圏ではすでにこの語に対する考察や、この語を用いて現代世界の変化を読み解こうとする多くの成果が出されているにもかかわらず、まだ十分には学問的に精査されていない。むしろマスコミ用語としてアメリカのトランプ現象を説明する際に用いられることが圧倒的に多い。そこに私たちがこの語を取り上げようとする意義がある。

なお学問的に精査されていないということは、この言葉、概念に意義や可能性がないということの意味しないと考えている。たとえ私たちの考察の結果、結論は「現状、まだ使えるものではない」となったとしても、精査はしておくべき概念である。というのも、「なぜ戦争が起ころうとしているのか」というドゥブーフ氏の予測は不幸にも当たってしまったからだ。原書が書かれてまもなくロシアのウクライナ侵攻が始まり、ハマスとイスラエルの紛争が始まった。ドゥブーフ氏は早速「トライバル化」のロジックで *Waarom dit niet de laatste oorlog is. Over de psychologie van internationale conflicten* (『どうしてこれは最後の戦争ではないのか。国際紛争の心理学』) をベルギーの大手専門書出版社 Lannoo から出版している (2022年)。また本書は翌年に、やはりベルギーの大手フランス語出版社 Editions Racine から、*Pourquoi ce n'est pas la dernière guerre: sur les raisons psychologiques des conflits internationaux* として翻訳され出版されている。注目されている証拠である。

別で論じたように、tribalization, tribalism をタイトルに掲げテロとの関係を論じる研究書は以前から世に出ているが、ドゥブーフ氏の刷新は、トライバル化の原因を人の心理に求め、そこからメカニズムを明らかにしようとしているところにある。本稿は、その内容を端的、簡潔に伝えるものとして意義があり、また今年度の共同研究の成果の一端を示すにふさわしいと考え、ここに訳出する次第である。

このたび龍谷大学社会科学研究所の共同研究として、この概念を検討する機会をいただいた。そしてその支援でドゥブーフ氏を龍谷大学に招き、学生たちも交えたところで講演していただいた。学生の参加者は約60名であった。ドゥブーフ氏には、「学生たちにもわかりやすく『トライバル化』を教えてください」とお願いをした。そのおかげか、講演後には学生たちとの活発な質疑もみられた。

一部を、筆者による今後の課題とともに紹介すると、「個人の心理の問題であるトラウマが集団化し、大きくなって国民全体がトライバル化することはありうるのか」という問いがあった。それに対しての答えは「私の友人が亡くなれば私は悲しい。私たち共通の友人が亡くなれば、私たちが悲しい。そのように集団での悲しみは存在しうるし、よって集団化したトライバル化もありうる」であった。社会心理学的にはそうだろうが、それが集団として過激化していく過程についての説明がもう少し求められるかもしれない。

また講演の後半でソーシャルメディアの負の影響を述べているが、「SNS には会えない仲間とつながることができるというポジティブな影響もありうるのではないか」という問いに対して、「確かに良い面と悪い面がある」と一部認めながらも、SNS では結局自分の意見に同調する意見しか目にしなくなる。他の意見がでなくなってしまうのが現状だとの解答がなされた。おそらく質問者と回答者で前提としている SNS が異なっていることに加え、SNS 自体が問題ではなく、その効果はかなり使い手にゆだねられている点を再考する必要があるだろう。

さらにドゥブーフ氏はその著書において「グローバル化」を推進することを強調し、「トライバル化」を「グローバリズムの途絶」として歴史的に示しているが、「果たしてグローバル化はそれほど正しいものなのか」という問いも出た。それに対しては「グローバル化は人類の歴史そのものであり、その発展を遮ることは誤りだ」と断定していた。そもそもわたしたちは「グローバル化」を近年の新自由主義的な市場至上主義経済の拡大と捉えており、ドゥブーフ氏はそれをイスラ

ム文明や中国文明、ヨーロッパの古代文明が交流し発展していく過程と大きく捉えているため、そこに齟齬がある。この点の正誤を判断することは難しいが、「グローバル化」についてより考察、議論する必要があるだろう。

最後に、「トライバル化が戦争を引き起こすことは同意するが、戦争は当事者にトラウマを引き起こす。そのトラウマがもとになってまた戦争が起こるのだとすれば、トラウマと戦争、トライバル化の悪意循環をどこで断ち切れるのか」という質問がなされた。この「トライバル化と戦争の因果関係」について、ドゥブーフ氏は、この議論が明示的でないことは認めつつも、それを断ち切るのが私たちの役割であり、トラウマに苛まされてもトライバル化しない決断と勇気を訴えた。

当日は講演と質疑が終わっても学生がドゥブーフ氏のもとに来て質問するなど盛況であった。ドゥブーフ氏の話が学生にとって「考える」良い機会を提供したこと証左である。

繰り返すが、「ナショナリズム」や「ポピュリズム」同様に概念というものが多義的で、われわれはそれを承知で用いている。ここで取り上げる「トライバル化」もまた多義的で曖昧なまま用いられているが、ヨーロッパでポピュリズムが勢いを増しつつあり、アメリカでは再びトランプ旋風が吹き荒れそうな昨今、この概念はまだ精査されるべきであろう。その導入として以下の講演録を参考にしていきたい。

最後に、ドゥブーフ氏来日に際しては、社会科学研究所の岡田さん、堀井さん、宮ノ原さん（当時）にご尽力いただいた。旅行会社、通訳などのエージェントの皆様にも深く感謝したい。また臼井陽一郎先生を始め、多くの先生方の力を借りた。本稿の翻訳は、臼井氏とともに『トライバル化する世界』の翻訳にかかわったわたしたち天理大学の小松崎利明先生にお願いした。心から感謝する次第である。

以上

松尾 秀哉

翻訳

まず、講演にお招きくださった龍谷大学、とくに松尾秀哉教授に感謝申し上げます。また、臼井陽一郎教授（新潟国際情報大学）、小松崎利明准教授（天理大学）をはじめ、わたしの著書『トライバル化する世界——集合的トラウマがもたらす戦争の危機』の日本語訳に携わってくださった先生方にもお礼申し上げます。たいへん光栄に思います¹⁾。

この本の物語は、9・11としても知られている2001年9月11日から始まります。この日、旅客機がニューヨークのツインタワーとペンタゴン（アメリカ国防総省）に激突しました。ここにいらっしゃるみなさんの多くは、まだ生まれていないときのことです。ですから、それが世界にとってどれほど衝撃的な出来事であったのか、想像するのは難しいかもしれませんが。ツインタワーは、世界で最も強大な国の最も力のある都市にある、経済・金融の象徴でした。ペンタゴンは、世界最大の軍事大国であることを象徴するものでしたし、現在でもそれは変わりません。この出来事の数時間後、ツインタワーはもうこの世に存在しなくなっていました。

わたしはあの事件が起きたとき、自分がどこにいたのかを正確に覚えています。ブリュッセルにあるフランデレン議会の自分のオフィスでした。友人から「テレビでCNNを観てみろ」というテキストメッセージが送られてきました。テレビを点けて観ていると、2機目の飛行機がツインタワーに激突するという信じ難い光景が映し出されたのです。わたしはその友人に、「これは戦争を意味するね」とテキストメッセージを送りました。彼は「そうだね、でも誰に対する戦争だろう」と返信してきました。この問いに対する答えは、わたしにはまったくわかりませんでした。

わたしがこの話をしているのには、二つの理由があります。一つは、いまから23年前に起きた9・11が、地球上のすべての人に衝撃を与える数少ない出来事の一つだったからです。あの日の

ニューヨークの映像を見たことがないという人は、ほとんどいません。二つ目の理由は、あの日のニューヨークでの出来事が世界を劇的に変えてしまったからです。もちろんそれは、アフガニスタンでの戦争やイラクにおける破滅的な戦争の原因となりました。しかし、いま申し上げている変化というのは、もっと根源的なものです。9・11は、わたしたちの考え方を変えたのです。それによって、あるプロセスが始動しました。わたしが本のなかで「トライバル化 (tribalization) のプロセス」と呼んでいるものです。

トライバル化とはなにか。それは、トラウマをもたらす出来事に対する、集団の心理的反応のことです。これをわかりやすく説明するために、まず個人の心理からお話ししましょう。人がトラウマ的な経験をしたとき、たとえばパートナーが突然この世を去ってしまったとき、その人にはさまざまな反応が見られるでしょう。考える一つの反応は、アイデンティティの危機です。ショックがその人自身の根幹にかかわるものであるために、どうしてよいかわからなくなるというものです。そして、自分は誰なのか、なぜここにいるのかといった疑問を抱きます。その答えを得るために、そしてアイデンティティの危機から抜け出すために、人によっては一つのアンカー、一つのアイデンティティ的要素を探し出し、それに固執します。つまり、たった一つの明確なアイデンティティを選び取ろうとする人がいるということです。これは通常、人がある宗教セクトや暴走族に入ることを選択するやり方です。その時、人は、トライブ (tribe)²⁾、とりわけそのなかで得られる安心感を追い求めているのです。そして、曖昧で複雑なアイデンティティではなく、はっきりとはしているもののネガティブなアイデンティティというものを好むのです。

このトライバル化のプロセスは、個人だけでなく集団、社会そして世界全体にも起こるというのが、わたしの理論です。これが起こると、歴史に混乱が生じます。多くの人が考えていることとは異なり、世界史はグローバル化の歴史です。5000年前にシュメール帝国とバビロニア帝国が誕生し

て以来、世界は結びつきを深めてきました。紀元前500年頃には、中国とペルシャ、ローマを結ぶシルクロードの往来が活発になりました。シルクロードは、絹などの産品を運ぶための道であるだけでなく、発明や宗教や思想が行き交う道でもありました。だから、グローバル化は新しいものではありません。ここ50年の間に起きたことではないのです。グローバル化は、歴史の重要なエンジンの一つであって、ある時期を除いて、けっして止まることはありません。しかしその「ある時期」が訪れると、グローバル化は停滞します。貿易ルートは遮断されます。壁は高くなります。そして政治構造が崩壊します。これらは歴史が退行する時期、すなわちトライバル化の時期です。一般にそれは戦争が起こるときでもあります。

ここで、最も近い過去に起こった顕著なトライバル化の時期についてお話ししましょう。それは、グローバル化が崩壊した第二次世界大戦のときです。この大戦はどのようにはじまったのでしょうか。一部の歴史書には、すべてはウォール街の大暴落からはじまったと書かれています。——人びとはお金を失い、ときとして持ち物すべてを失うこともあった。そのため、極端な解決策をもつ極端な運動に対して無防備になった。それは、ファシズムであり、ナチズムであり、コミュニズムだった——ということです。しかし、この説明は正しくありません。トライバル化の原動力は大暴落以前から芽生えていました。レーニンが権力を手にしたのは1917年、ムッソリーニは1922年です。たくさんのファシストや権威主義的な指導者がヨーロッパ中にいました。彼らは経済ではなく、一つの大きなトラウマの経験、つまり第一次世界大戦とその結果生じた出来事にどう対処するかについて語っていたのです。

第一次世界大戦は、ほとんど偶然にはじまった戦争でした。複数の出来事の結果として大規模な戦争がはじまったのです。この戦争がもたらしたのは、2000万人の死者だけではありませんでした。戦争がはじまる直前にも、戦争中にも、そして戦後にも、世界は大きく変わっていたのです。わずか10年で五つの帝国が消滅しました。1912年に中

華帝国、1917年に帝政ロシア帝国、1918年にドイツ帝国とオーストリア＝ハンガリー帝国、そして1922年にオスマン帝国です。これらの帝国のなかには、1000年、あるいは2000年の歴史をもつものもありました。こうした帝国の消滅は、何百万もの人びとにとって非常に大きなトラウマとなったのです。

しかし、ファシズムが生まれた場所は、これらかつての帝国ではなくイタリアでした。イタリアは第一次世界大戦の戦勝国側であったものの、1919年のベルサイユ条約では、期待していた領土を見返りとして得ることができなかったのです。そのうえ、帰還兵たちは、共産主義者による抗議活動が自分たちの町を占拠しているのを目にします。そこで、兵士たちは反撃を決意し、戦闘集団「戦闘者ファッシ」という小グループを組織しました。ここからファシストという呼び名が生まれました。

興味深いことに、日本もベルサイユ条約とそれに続く諸条約に深い失望を覚えていました。期待していた領土を得られなかったからです。加えて、当時の列強は日本に海軍力の制限を強制したのでした。

イタリアのファシストの指導者であるベニート・ムッソリーニは、1922年に権力を掌握しました。彼の基本姿勢は、ローマ帝国の神話の過去を振り返り、祖国を再び偉大なものにするという意志を示すというものでした。その手段は、強力な権威主義的リーダーシップであり、「奴ら対われわれ」というトライバルな言説でした。そこでは、共産主義ロシアが外にある敵とされ、左翼とリベラル派が内なる敵とされました。

このイタリアで見られたトライバル化のプロセスは、1920年代から1930年代にかけて、北米、ラテンアメリカ、中東、さらにはアジアへと、ウィルスのように世界に拡散しました。多くの社会がアイデンティティの危機に直面しました。人びとは神話の過去のなかにアンカーを求めはじめました。自分たちの国を再び偉大にしてくれるものはなにか、と問いました。誰が敵なのかを教えてくれる強い指導者を探していたのです。幕政時代を取り戻そうとする動きが起きた日本も同様でした。

政治だけでなく、経済においてもトライバル化は見られました。トライバル化の時代には、グローバル化に抗して税の壁が築かれます。アメリカは自国の農家を守るために関税戦争をはじめました。税法が一つまた一つと制定されました。そして1929年にウォール街の大暴落が起こると、さらに多くの人たちがトライバル的な思考へと駆り立てられたのです。つまり、当初は政治的なトライバル化であったプロセスが、経済的なトライバル化と金融危機によって勢いを増したのです。わたしたちはみな、その結末を知っています。世界が経験したことのない最も壊滅的な戦争です。

ここでわたしたちが問うべき問題は、いま再び同じようなトライバル化のプロセスが目の前で進行しているのかということです。わたしが本の執筆を開始した2016年当初、トライバル化が進行していると考えた人はいませんでした。いわんや、そのことを本にして出版しようとする人はいなかったのです。2018年にいよいよ本が出版されたとき、わたしの説を受け入れてくれた数少ない人たちの一人が松尾教授であり、翻訳に携わってくださった先生方でした。いまでは、過去20年ではないかが根本的に変わってしまったのだということは、誰の目にも明らかでしょう。まず、経済的な事実から見ていきましょう。国際貿易は1940年代以来はじめて減少しています。グローバル化は2008年以降停滞し、2019年からは衰退しはじめています。実際のところ、2020年のグローバル化のレベルは2005年と同程度です。グローバル化というのは子どもと同じで、成長しないというのはなにか問題があるということです。アメリカは再び関税戦争をはじめており、貿易協定やその他の協定を破棄しています。しかしこれは、経済だけの話ではありません。

2006年以降、他の多くのパラメータも同様に低下しました。民主主義国の数は減少しており、自由と人権に関する指数も低下しています。ベルリンの壁が崩壊した1989年には、国家間に存在する壁やフェンスの数は15でした。2023年現在、この数は少なくとも80になっています。

なにが起きているのでしょうか。9・11の攻撃があり、その数年後にマドリッド、ロンドン、イスタンブール、ムンバイ、モンパサで、さらに近年ではパリやブリュッセルでテロが起きています。わたしの見立てでは、これらはすべて、トライバル化の新たな波を引き起こしてきている、まさにトラウマを生じさせる出来事なのです。権威主義的なリーダーシップが世界中いたるところで台頭しているのを、わたしたちは目にしています。ロシアのプーチン、トルコのエルドアン、エジプトのシーシー、中国の習近平、インドのモディ、イスラエルのネタニヤフ。西側にもいます。ハンガリーのオルバーン、ポーランドのカチンスキ、イタリアのメローニ、そしてもちろんアメリカのトランプ。過激な宗教が台頭するのも目にしています。ISIS [イスラーム国] だけでなく、インドには過激なヒンドゥー教徒がおり、アメリカにも過激なキリスト教徒がいます。分極化が起き、辛辣な言葉が増えているのを目にしています。ヨーロッパにおいても、そしてこの日本においてさえ、暴力的な市民組織の復活が見られます。またしても、人びとは敵について口にしています。今回は、いわゆる裏切り者、あるいは内なる敵は、ユダヤ人ではなくムスリムです。非理性的なイスラム嫌悪がいかにわたしたちの社会を毒しているか、誰もそんなことはないとは言えないでしょう。

わたしは、こうしたトレンドを見て、これが戦争につながるだろうということを2018年に予測しました。残念なことです。わたしたちはいま、ウクライナでの戦争の真っ只中にいます。2022年、わたしは他にも戦争が起これと予測しました。サヘル地域での武力衝突がその一例となるのですが、別の地域でも発生する可能性があります。ヨーロッパのバルカン半島は不安定ですし、もちろん台湾や、日本と台湾との間にある島々も同様です。しかし、わたしが現実にもっと恐れているのは、アメリカ国内の内戦です。対立する集団間のヘイトスピーチを耳にすれば、それがありえないことだとは言えないでしょう。

しかし、みなさん、最後に前向きな話で今日の講演を締めくくらせてください。避けられないも

のなど歴史には存在しません。歴史を作るのはわたしたちであり、その逆ではないのです。もしわたしが決定論的な歴史観の信奉者であれば、この本を書くことはなかったでしょう。それどころか、いまごろ南太平洋のどこかの島で生活していたと思います。トライバル化のプロセスを逆転させ、グローバル化の軌道に戻すことは可能だと信じています。問題はその方法です。政治的リーダーたちを含め多くの人は、ちょっとだけトライバルな言説を用いるという戦術をとれば [トライバル化を進行させている勢力の支持者を自陣に引き込むことができ] トライバル化 [の勢い] を止めることができる、と考えているようです。ほんのちょっとイスラム嫌悪的になる、ほんのちょっと反ヨーロッパ的になる、といったことです。しかし、それはうまくいきません。

トライバル化に打ち勝つには、信念しかないと思っています。オープンでインクルーシブな社会こそが、前に進む唯一の道だという信念です。世界はもっと協力し合わなければならないという信念です。その意味で、国連という場を軽視するのではなく、もっと活用しなければなりません。そして、人権は一つの選択肢なのではなく、世界中すべての社会の礎石であるという信念です。

みなさんのような学生、いや、ほとんどの人にとって、こうしたことは自分の日常とはあまりかわりのないことのように思えるかもしれません。けれども、トライバル化のプロセスを止めるためにわたしたち一人ひとりにできることがある、とわたしは信じています。まず、自分たちとは違う文化や文明について学ぶことです。実際に足を運ぶことも大切ですが、読書を通じて異なる土地に住んでいる人びとの考え方を理解しようとするのが大切です。他の文化のトラウマ的経験を理解するのはとても重要です。

わたしたちにできることの二つ目は、分極化を助長しないことです。その方法の一つは、人びとを引き裂くようなメッセージをソーシャルメディアで拡散させないことです。わたしが行った別の研究では、自分が賛同しないものを広めた場合、たとえ同意しないということをそこに付け加えたとしても、その賛同しないメッセージに翼を与え

て拡散させることになるのだということがわかりました。

三つ目は、アルゴリズムと戦うことです。ソーシャルメディアでは自分が一番見たいと思うものを見せられ、最も意見の合う友だちのメッセージを見せられているということは、みなさんご存知だと思います。そのことがもつ危険性は、アルゴリズムによって自分とは異なる意見をほとんど目にしないような環境に置かれてしまう、というところにあります。したがって大事ななのは、自分が同意できないものについても、それをがんばって読む努力をすることです。それが、自分とはまったく異なる考え方をもつ人びとの存在を確認し、理解するための唯一の方法なのです。

こうした三つのことを実行するのは、簡単なこ

とではありません。ときに煩わしく、しんどいことです。しかし、それこそがわたしたちを、そして社会をグローバル化の軌道に戻し、戦争ではなく平和の道を歩む唯一の方法だと心から信じています。日増しに緊迫度は高まっています。さあみなさん、今日からはじめましょう。ご清聴いただき、ありがとうございました。

注

- 1) 以下、講演では節の切れ目などはないが、文章化したときの読みやすさを考慮し、適宜訳者が区切りを入れている。
- 2) 一般には「部族」と訳されるが、ここでは一般的な「部族」に特定されないため「トライバル化」とカナ表記した。